

湊町新潟の再生

Regeneration of a Port City Niigata

岡崎篤行	新潟大学工学部建設学科 准教授	Atsuyuki OKAZAKI	Associate professor, Civil and Architecture, Faculty of Engineering, Niigata University
今村洋一	新潟大学工学部建設学科 助教	Yoichi IMAMURA	Assistant professor, Civil and Architecture, Faculty of Engineering, Niigata University

Niigata is originally a port city. It was relocated and built as a new town on the present site in 1655, which is typical for port towns along the northern coast of Japan. About a half of the city area were burnt down by fires in Meiji period. Niigata did not suffer from major bombing during the WWII. The damage by another fire and an earthquake after the war was limited. Accordingly many historical building remain in the center of the city. The city is now being regenerated as a unique port city.

1. 港湾都市新潟の起源

新潟市は、佐渡、北海道、大陸などへの航路を持つ、本州日本海側随一の港湾都市である。幕末には、函館、横浜、神戸、長崎と共に、開港五港に指定された。平成の大合併により、主に在郷町由来の周辺市町村と合併し、人口が約50万人から80万人に拡大、政令市となった。中核となる旧新潟市の中心部は、信濃川を挟む二つの湊町が母体である。一つは長岡藩の湊町、新潟、もう一つは新発田藩の湊町、沼垂（ぬったり）である。近世以来、市の中心繁華街を形成する古町地区は新潟側であり、戦後に開発された万代シティや新潟駅は沼垂側に位置する。

2. 近世都市計画の到達点としての湊町新潟

近世初期、日本海側の城下町がこぞって外港を建設した。その代表ともいえる新潟町は1655（明暦元）年に現位置に移転したとされ、北前船の寄港地として繁栄を極めた。グリッドパターンの街路網と掘割、均等な間口の敷地、一直線に並ぶ寺院群など、極めて合理的な都市計画によるニュータウンである。町屋のみならず武家地、寺院に至るまで『町』空間が卓越し、『近世都市の到達点』とも言われている（図1）。明治に入ってから、信濃川沿岸方面にモザイク上に開発が進んだ（図2）。

3. 近代から戦後の災害と復興

1880（明治13）年に続き1908（同41）年には二度の大火が発生し、市街地の半分以上を消失したとされる（図3）。ま

た市区改正などにより、近世には畑地などであった日本海側の砂丘地帯が開発された。第二次世界大戦では、原爆投下候補地であったことから、主要都市ながら本格的空襲を免れた。1955（昭和30）年の新潟大火では、市中心部の一部を消失した（図4）。復興にあたり区画整理事業が実施され、その一環で掘割の埋め立ても行われた。国体が開催された1964（昭和39）年までに、掘割は姿を消した。同年には新潟地震により、市中心部全域で浸水等の被害を受けたが、最も古い明暦からの市街地は被害を免れている。また、建物の倒壊も壊滅的ではなかった。

4. 市街地拡大から湊町の再生へ

高度成長期から市街地拡大が進んだが、近年は新規開発の抑制が打ち出されている（図6）。また、景観面の取り組みも進んでいる。大規模空襲を受けず、大火や地震の被害も限定的だったことから、市中心部では町屋を始め、歴史的建築が多数残る。明暦からの都市構造も基本的に変わらず、掘割再生運動も起きている。また古町は日本有数の花街（かがい）でもある（図5）。ミニ東京を目指して来た新潟は、今、湊町としての再生に舵を切っている。

<参考文献>

古川貴之・岡崎篤行（2005）「湊町新潟における近代以降の都市計画通史—旧新潟町地域を対象として—」, 日本建築学会北陸支部研究報告集, 第48号, pp.413-416



図1 明暦の町割

出典 高橋康夫ら編(1993)『図集日本都市史』東京大学出版会

1655年に新潟が現在地に移転したときに上図に見られる新しい町割が施されたとされる。一直線に並ぶ寺院、南北の通りと東西の小路で構成される格子状の街区、縦横に巡らされた掘割による整然としたプランとなっている。伊藤毅は「[町]空間が卓越し都市全体をおおう点が注目される」としている。

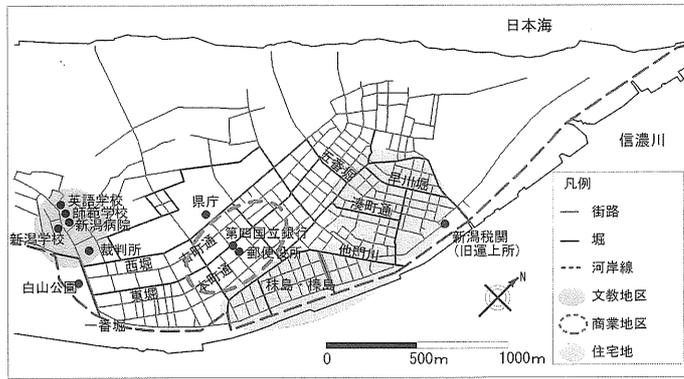


図2 明治初期の都市改造

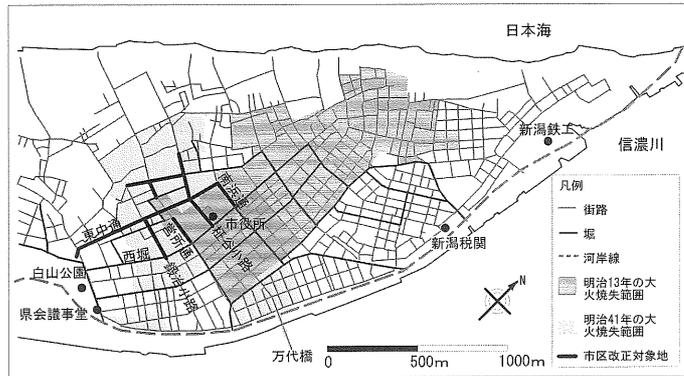


図3 明治末期の大火と都市改造

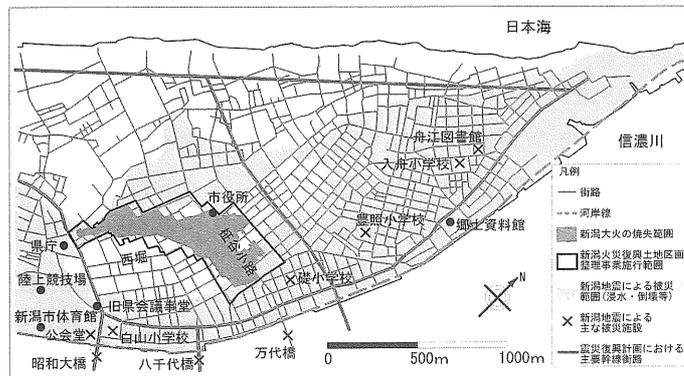


図4 戦後の大火・地震と都市改造

明治に入っても江戸期の市街地は商業地区として繁栄を続けた。奉行所には県庁が入っている。また1869(明治2)年に擬洋風建築の運上所(後の税関庁舎、重要文化財に指定され現存)が建設され、それに至る湊町通り(しもまち)地域が開発された。また、株島・榛島は楠本正隆県令によって高級住宅地として開発された。西側には、現在も学校町通りと呼ばれる文教地区が形成された。

明治13年に続き同41年には二度の大火が発生し、市街地の半分以上を消失したとされる。これを受けて新築の際は瓦葺きにする、街道沿いは横屋根(平入り)にするなどの建築制限が実施された。元来の妻入りの町並みが一変する要因になったと考えられる。また、市区改正により旧奉行所で行き止まりだった榎谷小路が海側に延伸され、砂丘地帯での住宅地開発が進んだ。

新潟大火の被害は市の最中心部19haに及び、市役所など主要施設を消失した。復興区画整理と防火建築帯の整備が実施されたが、旧市街地の構造を大きく変えるものではなかった。新潟地震では川側全体に渡って浸水したが、建物の倒壊は限定的だった。また明暦に建設された市街地は浸水も免れた(図の白い島状部分)。昭和4年建設の萬代橋(重要文化財として現存)も崩落しなかった。

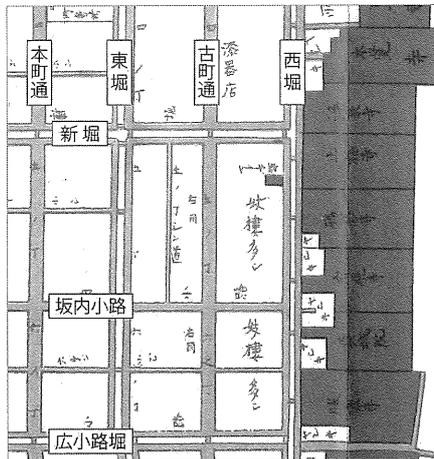


図5 古町花街と新道

出典 『越後新潟全図』(1870) ※方位は下が北

「妓楼多シ」「五ノ丁シ道」の文字が読み取れる。明治末期の度重なる大火の契機に、背割り線に新道を整備し、芸妓の営業地を集約して古町花街を形成したと思われる。一方、町はずれには娼妓が営業する遊郭を新たに建設した。



図6 土地区画整理事業施行区域と景観保全の地区指定

出典 新潟市「新潟市の土地区画整理事業」(ベース図)

戦前から戦後にかけて住宅地の拡大に伴い実施された区画整理は、東区に集中している。西区や中央区南部はスプロールとなった。平成以降、農業の不振と連動して田圃での宅地開発が進んだが、コンパクトシティ思想により見直しが表明されている。また、リーマンショック直前に信濃川沿いにマンションが乱立したため、景観計画の特別区域により高さ規制を設けた。他にもマンション建設に絡んで県内で初めて、地区計画や高度地区による高さ規制が導入された。